水曜のリリーベル

霧野あみ

第一週　オリジナルブレンド

今時珍しい、カウベルの音を鳴らしてドアを開けた客は、疲れた顔をした男だった。

「いらっしゃいませ」

男は、生気のない目で店内をチラリと見回した。

落ち着いた内装。控えめな間接照明。
昔ながらの喫茶店、という感じだ。

「お好きな席へどうぞ」

カウンターの向こうから現れた女性店員が、グラスに水を注ぎながら微笑む。

男は黙ってカウンター席へ進み、一番奥の席に鞄を置き隣の席へ座った。

水を置きメニューを差し出そうとする店員を遮り、目も合わさずに「コーヒー」と呟くと、浅い背もたれに背を預け ため息をつく。

「・・・かしこまりました。少々お待ち下さい」

女性店員はメニューを棚に戻し、カウンターの中へ戻った。

慣れた手つきでフラスコの底を拭うと湯を沸かし、漏斗に豆をセットする。

喫茶 リリーベル。

午後４時の店内には他に客の姿は無く、斜めに差し込むはちみつ色の西日で満たされていた。

２人掛けのテーブル席には、窓に嵌め込まれたスズラン模様のステンドグラスが 美しく彩を落としている。

だが、カウンター席の奥半分は薄暗く陰になっており、間接照明の灯りがぼんやりと届くだけだった。

カウンター席の男はグラスを手に取り、ゆっくりと一口だけ、水を飲んだ。

グラスをテーブルへ戻すと、そのまま両肘をついて目を覆い、再び深いため息をついた。

カウンターの向こうでは、沸騰したフラスコを火から外し、漏斗をセットしている。

フラスコを火に戻すと、程なくして湯が吸い上げられ、漏斗の中で粉と混じり合った。

「ずいぶんお疲れのようですね」

店員は静かに声をかけながら、竹べらでコーヒーをそっとかき混ぜ、漏斗の上に渡すようにそのへらを置いた。

まるで、なにかの儀式の様に。

「よかったら、これ・・・どうぞ」

カウンター越しに、男に熱いおしぼりを差し出した。

男はそこで、初めて店員の顔を見上げた。

色白で清楚な顔立ちの女性が、優しい目でこちらを見下ろしている。
薄暗いカウンターの中、年齢はわからなかったが、おそらく２０代後半から３０歳ぐらいだろうか。

艶やかな黒髪を斜めに分け 後ろでギュッと１つに結わえたその姿には、凛とした趣があったが、差し出された細い腕は、手首の血管が青く浮き出るほど白く華奢だった。

「ああ・・・・ありがとう」

男はおしぼりを受け取ると、薄いビニールの袋を破いた。

「熱いうちに目元に当てて、ギューッて押し付けるようにすると、疲れが取れますよ」

…無意識のうちにおしぼりを広げて顔を拭こうとしていた。

男は間一髪、丸まったままの熱いおしぼりで、教わったとおりに試すことが出来た。

「ああ・・・・本当だ。これは気持ちいいね」

先ほどと同じ姿勢を取りながら、男はまたため息をついた。
だが今度のため息は、疲れを吐き出したかのような、リラックスしたものだった。

カウンターに両肘をついて、目元の熱いおしぼりに頭の重みを預けるように、ぐっと指を押し込む。
そうすると、目の奥がじんわりしてくる。

数回繰り返すうちに、頭の奥のしびれが消えた。

しびれが消えたと感じた時に、初めて自分の頭の中が痺れていたことに気づいた。

「まぶただけじゃなく、目の下も押してみるといいですよ」

店員は再び竹べらで漏斗の中を混ぜると、漏斗の淵を軽くコンコンと叩き、へらのしずくを切った。
左手でガスを消し、同時に右手に持った竹べらを、脇にある水を張ったグラスに差し入れる。

くるりと後ろを向いてソーサーを取り、湯を張ったバットから温まったコーヒーカップを取り出す。
布巾でカップの外側の水気を軽く拭き取り、ソーサーの上にカップを乗せた瞬間、漏斗の中のコーヒーが、フラスコに落ちてきた。

流れるような無駄の無い動きとコーヒーの落ちる見事なタイミングは、日舞かなにかを見ている様だった。

男は、おしぼりを折り返し中心の温かいところを探して露出させ、目の下を温めながらそれを眺めていた。

カウンターに置かれた空のカップに、静かにコーヒーが満たされる。

スプーンとちいさなミルクピッチャー、そして２粒のクッキーを添えて、差し出された。

「お待たせ致しました。リリーベル、オリジナルブレンドです」

第一週　予言

男はソーサーを引き寄せ、コーヒーの香りを大きく吸い込んだ。

「ああ、良い香りだ」

大きく息をつくと、ネクタイを少し緩めた。

店に入って、ものの数分。
いつの間にか、頭の中のしびれや首から肩にかけてのこわばりが軽くなっていた。

まだ、肝心のコーヒーを飲んでもいないのに。

もう一度香りを楽しんでから、熱いコーヒーを一口啜った。

「…うん。旨い」

「ありがとうございます。マスターのこだわりのブレンドなんですって」

店員は嬉しそうに微笑むと、器具の片付けを始めた。

なるべく音をたてない様に、そっと取り扱っているのがわかる。

神経が疲れている時、瀬戸物やガラスの触れ合う音が耐え難く耳につくことがある。
いかにも疲れきった客の様子に、細やかな心遣いをしてくれているのだろう。

（この女性は、きっといい奥さんになるだろうな……）

思わず、男の視線は店員の左手薬指を探った。
そこには案の定、結婚指輪が嵌まっていた。

「マスターは別の人なんだ」

「ええ。私はランチタイムとマスターの休憩の間だけ、お手伝いしてるんです」

会話の間も、片付けの手は止まらない。
とても静かに。そっと器具を洗い、そっと水を流す。

「お客様は、お仕事、どんなことをされてるんですか？」

男は自嘲気味にフッと笑うと、カップをソーサーに戻した。

「くだらない仕事だよ。誰がやっても同じ。何の面白みも無い」

店員は、「あら…」と言って、小さく笑った。

「ふふ。なんだか、やさぐれてるんですね」

そう言われて、男はちょっぴり恥ずかしくなった。

（いい歳したオッサンが、何をガキっぽい愚痴たれてんだよ）

だが、言葉が勝手に口をついて出てしまう。

「そりゃ、やさぐれもするさ。くだらない仕事、単調な毎日、つまらない人生」

ハハ、と嗤って また一口、コーヒーを飲む。

「じゃあ、私がお祈りしておきます。来週までに、何か楽しい出来事が、あなたに起きるように」

店員は得意気な微笑みを浮かべ、片方の眉をヒョイと吊り上げた。

「私のお祈りは、効くんですよ～」

心持ち身を乗り出すように秘密めかして言うのが可笑しくて、男はつい、笑ってしまった。

疲れきったように下がっていた口角がキュッと上がり、白い歯がこぼれる。
笑顔になると、男の印象はそれまでとは全く変わって見えた。

「あ、信じてませんね？ホントに効くのになあ」
店員はそう言って、口を尖らせる。

「ゴメンゴメン、だって・・・あんまりにも”ドヤ顔”だったから」
男は、急いで水を飲んで、口元に残った笑いの痕跡を誤摩化した。

「で、楽しい出来事って、例えばどんな？」

「う～ん……そうですねえ……」

店員は軽く握った右手を口元に持ってゆき、その肘を左手で抱え込んだ。
その姿勢のまま、視線をさまよわせる。
考え事をするときの癖なのだろうか。

やがて、男の目を真っすぐに見据えた。
切れ長の二重。心の裏側まで見通されそうな、理知的な瞳だ。

男は思わずギクリとして、カップに伸ばしかけた手が止まった。

店員は、ひたと男の目を見据えたまま小首を傾げた。

「お客様、普段のお昼ご飯って、どんなところで召し上がります？」

視線の勢いと質問内容のギャップに少したじろぎながらも、男はなんとか有名な牛丼屋チェーン店の名前を挙げた。

「え、お昼？え…っと……＊＊＊とか。かな？」

「……ふむ。なるほど」

店員はフムフムと頷きながら視線を落とし、数秒後、ニッと笑って口元の人差し指を立てた。

「では。あなたは近いうちに、向上心に満ちた深窓のご令嬢と、運命の出会いを果たします」

このあと彼女の口から紡ぎだされたストーリーは、途方も無く現実離れした展開ながらも、奇妙に生き生きとしたリアリティを持って語られた。

全ての予言を聞き終えた時、男はそれを信じたわけではなかったが、それでも「明日の昼食は、＊＊＊に行ってみようかな」という気分になっていた。

イヤ、それは予言ですらなかった。
ただの、「何か楽しいこと」の、例え話だった筈だ。

だが男は、久々に心が浮き立つのを感じたのだ。

本当に、何年振りだろうか。
明日が来るのが、楽しみに思えたのは。

第一週　物語

ランチタイムを少し過ぎた、午後２時。

男は＊＊＊の自動ドアをくぐり、いつも通り店に入った。

「いらっしゃいませー！」

混雑のピークを過ぎ 空いた店内に、店員の威勢の良い声が響く。

内ポケットから財布を取り出しながら、勝手知ったる様子で食券の自販機に向かう。

と。

目線の先に、細いハイヒールが映った。

視線を上げると、女性がひとり、自販機をじっと見つめている。

「あの・・・」
男が声を掛けると、女は驚いて振り向き、２・３歩後ずさりした。

「あ。ご、ごめんなさい。どうぞ、お先に」

「あ、いや・・・すいません。じゃあ」

男は軽く会釈して、目当ての食券を買った。

横目でチラリと女を見やると、唇を噛み締め固唾をのむ勢いで、こちらの行動を凝視している。

（何も、食券ひとつ買うのにそこまで必死にならなくても・・・）

吹き出しそうになるのを堪え、平静を装いながら食券と釣りを取ると、場所を譲った。

「もしかして、買い方わかりませんか？」

そう声を掛けると、女は慌てふためいた

「あ、ええ。いえ、大丈夫です。ご迷惑をおかけして、申し訳ありません」

あたふたとコインを投入する女に構わず、店員に聞こえないぐらいに声を落として話し掛ける。

「この店、メニュー名しか書いてないから、初めてだと分りづらいんですよね」

自販機を指差しながら、メニューの説明やトッピングの追加の仕方などをざっと教え、女が食券を買うのを手伝った。

無事に食券を買い終えた女は、深々と頭を下げて礼を言うと、まるでひと仕事終えたような満足げな表情で男を見上げた。

（まるで、初めてのお遣いみたいだな・・・）

「いえいえ。どういたしまして」などと会釈しながらそこを離れ、苦笑いを隠しながら適当な席に座ると、食券をテーブルに置いた。

「あの・・・すみません。お隣、よろしいでしょうか」

先ほどの女が、おずおずと腰をかがめてこちらを窺っている。

「ああ、どうぞどうぞ」

「すみません。初めてなもので、勝手が分からなくて。・・・本当に、ご迷惑ではありませんか？」

「いえ、とんでもない。構いませんよ」

やって来た店員に食券を渡すと、女が物珍しげにキョロキョロと店内を見回すうちに、あっという間に牛丼を運んできた。

「わぁ、もう出て来た・・・本当に、早いんですねえ」

テーブルに設置してある調味料や紅ショウガの使い方を教えると、いちいち感動している様子だ。

興奮気味に目を輝かせ、男の真似をして色々やってみる。

全てが整うと、手を合わせ「いただきます」と食べ始めた。

「あ、美味しい」

一口食べて飲み下すと、嬉しそうに笑う。

「お。お嬢様のお口にも、合いますか」

冗談で言ったのだが、女は赤くなって否定した。

「別に私、お嬢様なんかじゃありません。ただ・・・長く留学していて、最近帰国したばかりなので・・・・色々わからなくって」

・・・本物の、お嬢様だった。

突然、お嬢様はハッと息をのみ、急いで食べ始めた。
ほとんど噛まずに、丸飲みする勢いだ。

「ど、どうしました、急に？そんなに急いでるんですか？」

お嬢様は、「え？」と言わんばかりに男を見つめると、口の中のものを急いで嚥下した。

「こういうお店って、サッと食べてサッと出て行かないと、怒られて叩き出されるんでしょう？」

男は、今度こそ堪えきれずに吹き出した。

「あっはっはっはっは！！！何ですか、それ」

お嬢様は、しばらくキョトンとしていたが、みるみる赤くなった。

「だ、だって・・・友人がそう言って・・・」

「完全に、騙されてますね。それ」

両手で顔を隠してしまったお嬢様は、消え入りそうな声で呟いた。
「私、他にお店が無かったから、ものすごく勇気を出して入ったのに・・・」

まだクックッと笑っている男を、お嬢様は指の隙間から恨めしそうに見上げた。

「そんなに笑わなくたって、いいじゃないですか・・・・」

「…あははは。随分、浮世離れしたお嬢様ですね」
男は思わず笑って、話を中断してしまった。

「そう。高校から海外留学していたから、日本のことを知らないんです。
えーっと……美術の勉強で、イタリアとスイスにね、７年ぐらい…かな」

「ほう」

「嘘を吹き込まれたのは、中学の時。好奇心で牛丼屋に入ってみたいって言ったら、一緒にいた友人に言われたんです。あ、でも。お嬢様学校だったから、その友人も本当だと思い込んでたのかも」

「…かも？……って、これ、空想の話だよね？」

「そう。お祈りのコツはね、願う事を、出来るだけ具体的に、詳細に思い描くことなんです」

お祈りにコツがあったとは・・・男は、感心したように頷いた。

「なるほど。…それにしても、よく次々と思いつきますね」

店員は、ふふ…と笑った。

「話の大筋が決まると、枝葉もほぼ同時に浮かぶんです。DVDをポンッと渡されたみたいに。あとは、頭の中で映像が勝手に進んでいくんで、それを言葉にしてるだけ」

「…それは凄いな」

「長年の訓練の賜物です」

店員は重々しくそう言ったが、その目には悪戯っぽい光が覗いている。

目の力はとても強いのにキツく見えないのは、その光のせいだろうか。
それとも、くるくる変わる表情のせいか？

「でね、この後、２人は数日後に＊＊＊で再会して、その後もよく会うようになって、彼女のおばあさんに気に入られたりとか色々あって、彼女が起ち上げようとしてる事業を手伝うことになって、事業は成功して、めでたしめでたし」

店員は指を振って頭の中をなぞるようにしながら、一気に言いきった。

男は、店員がDVDを早送りしている姿を思い浮かべた。

「・・・・ずいぶん端折りましたね？」

「すみません。そろそろ仕事の終わる時間なんです。マスターが戻ったら、あがります」

時計を見ると、もうすぐ５時になろうとしていた。
いつの間にか、１時間近くも寛いでいたのだ。

「じゃあ、コーヒーも飲んだことだし、俺もそろそろ帰ろうかな……」

カウンターの中は、全て片付いていた。
あとは自分のカップを洗ってしまえば、彼女もすぐに帰れるだろう。

「あ、ちょっと待って下さい。彼女…お嬢様は、インテリアとか美術工芸品を扱う仕事を始めようとしてる人。それから…」

店員は、少し不思議そうに付け加えた。

「あなたは…毎晩、腹筋と腕立てを５０回ずつやるのが日課になってるみたいです」

男は、立ち上がりかけた姿勢のまま、動きを止めた。

「腹筋、腕立て？５０回？」

「はい」

「…毎晩？」

「毎晩です」

店員は、真顔で頷く。

「・・・なんで、また？」

「さあ・・・私にも、わかりません。でも、そうなってました」

第二週　カフェ・オ・レ

ドアに取り付けられた 素朴なカウベルの音を鳴らし、客が入ってきた。

「いらっしゃいませ」

カウンターの向こうから、あの女性店員が現れた。

「あら・・・お待ちしておりました」

ニッコリ微笑むと、グラスに水を注ぐ。

「また来ちゃいました」

男は若干はにかんだような笑顔を見せると、先週と同じ席に座った。

カウンターの奥から２番目。西日の射さない薄陰の中。

「運命の出会いは、ありました？」

テーブルに水とメニューを置きながら、店員はまるで内緒話でもするかのように いたずらっぽく笑いかける。

「いや、残念ながら」

男は苦笑いを浮かべ、答えた。

「あれー？おかしいなぁ。本気でお祈りしたんだけどな。・・・ま、でも。まだまだこれから、ってことで」

店員は肩をすくめ、笑ってみせる。

「ああ、でも・・・なんだか、楽しい１週間だったよ。＊＊＊にも何度か行ったんだけどね、ちょっと期待しながら」

「あはは。期待したんだ」

「そりゃ、まあ。ちょっとだけね」
男はニヤッと歯を見せ、親指で眉の辺りを掻きながら、メニューに目を落とした。

様々な種類、産地のコーヒーを取り扱っているようだが、数カ所に線が引かれメニューが消してあった。

「この間のブレンドも美味しかったけど、何かオススメとかって、ありますか？」

男がメニューを辿りながらそう訊ねた。

「んー、ありますけど・・・お客様、今日はホットミルクとかカフェ・オ・レなんかの方がいいんじゃありません？」

「え・・・」
男は顔を上げた。

「ここ。荒れてます。ちょっと、胃が弱ってませんか？」

店員が、自分の口の端を人差し指でチョンチョンと突つく。

つられて男は口元に手をやり、親指と人差し指で自分の口の両端を触ってみた。
たしかに、片方の口の端が腫れて炎症を起こしかけている。

「ほんとだ。気づかなかったな」

男はメニューを閉じると、店員に渡した。

「じゃあ、カフェ・オ・レで」

「かしこまりました」
店員はニッコリ微笑むと、カウンターの向こうへ回った。

午後４時過ぎの店内。

今日も他の客の姿は無い。

先週来た時には気づかなかったが、店内には聞こえるか聞こえないかといった低いボリュームで、クラシック音楽が流れていた。

静かな店内で、店員はほとんど物音を立てずに小鍋を取り出し、ミルクを温めはじめた。

そして前回と同様、慣れた手つきでコーヒーを淹れる。

（なんだかここは、やけに落ち着くんだよなぁ・・・）

ぼんやりとそんなことを思っていたら、自然に話し始めていた。

「先週さぁ・・・楽しいことが起きる、って言われたじゃない？」

「え？ああ、ええ」

「でさ、何ていうか・・・ちょっと、ウキウキ？じゃないけど・・・」
男は照れたように、フッと笑った。

「うふふ」

「なんかさ、今まで全く興味無かったのに、インテリアの店とか覗いてみちゃったり」

「あら、ステキ♪」

「たまたま美術館の割引券なんか貰っちゃって、柄にも無く観に行ってみたりさ・・・」

鼻の下を人差し指で擦りながら、男はまた笑った。

「芸術なんて、何にもわかんないくせにさ」

漏斗の中のコーヒーをそっとかき混ぜながら、店員が微笑む。

「でも、わからなくても、綺麗だなとか、すごいな、って思いませんでした？」

「ああ、うん。そうだな。思ったかもしれない」

「じゃあ、それで充分じゃありません？美しいものって、ただ見るだけで心の栄養になりますもの」

「ほう。・・・そういうもんですかねぇ」

温めてあったカフェ・オ・レ用のカップを取り出し、ソーサーに置く。
フラスコの下の火を止めると、温めたミルクをカップに注ぐうちに、濃いめに抽出されたコーヒーが落ちてくる。
そっと漏斗を外すと、フラスコの中のコーヒーを静かにカップへと注ぎ入れる。

カップの中で、ミルクとコーヒーがマーブル模様を描き出す。

（確かに・・・美しいものを見ていると、心が安らぐな・・・）

店員の全く無駄のない優雅な所作に見とれながら，男はそう思った。

スプーンと２粒のクッキーが添えられる。今日のクッキーはココア味のようだ。

普通のコーヒーよりひとまわり大きいカップが、音も無く差し出された。

「お待たせ致しました。カフェ・オ・レです」

第二週　予言

「そういえば、カフェ・オ・レって、初めて飲んだかも」

「あら。そうなんですか？」

「うん。今まではコーヒーばっかり飲んでたから。・・・なかなか、悪くないね」

本当は、『優しい味がする』と言いかけたのだが、男は気恥ずかしくなって咄嗟に言い換えた。

「じゃあ、この１週間は初めてづくしでしたね」

店員は、ふふ…と笑った。

「ああ・・・そうだね。本当に」

男はカップをソーサーに戻し、頬杖をついた。

「この店から始まって、インテリアショップに、美術館。で、カフェ・オ・レかあ。・・・この歳になると、新しいこととか新しい場所に行くとか、無くなってくるからなあ」

「あはは。まだ、『この歳』なんていうお歳じゃないでしょう？」

鈴を転がすような声で、店員が笑う。

「いやいや。もう充分、オッサンですよ」

「ふふ。男の人が本当に魅力を発揮するのは、３５歳を過ぎてからですよ」

男は照れ隠しのように、頬杖をついた手でもみあげ辺りの髪をクシャクシャと乱す。
「ハハ。それが本当なら、嬉しいな」

「まあ、胃は荒れてるけど」

店員は、ニッと笑って肩をすくめた。

男もつられて笑った。
「うん。胃は荒れてるけど」

おどけてガックリと項垂れるふりをするのを見て、店員はクスクスと笑う。

「うふふ。で、どうでした？初体験は」

「うん・・・」
男はそう唸って、ソーサーの上のスプーンを弄び始めた。

「なんかさ、新鮮だったよ。なんてことない事ばかりなのにね。・・・そう言えばここ何年も、会社と家の往復ばかりだったなぁ、って」

「あら。急に、内省的？」

ミルクを温めた鍋を洗いながら、店員が目を上げる。
それに気づかず、男はなおもスプーンを弄んでいる。

「あの話・・・端折られたとこね。あれが妙に気になっちゃってさあ」

「あら。すみません」

店員が謝ると、男は言い訳するように顔を上げた。

「いや、いいんだけど。その・・・自分で続き考えちゃったりして、さ」

照れたように「へへ」と笑い、カップを口に運んだ。

「あはは！ステキ。どんなお話になりました？めくるめくラブストーリー？」

カップを持っていない方の手を曖昧に上げ、男は笑顔のまま緩く頭を振った。

「いや・・・おねえさんみたいに上手く想像出来なかったけど。・・・それでもなんだか、楽しかったよ。何か起きるかもしれない、とか思って」

「ああ、そっかぁ。そのせいですね」

店員の得心したような声を不思議に思い、男が聞き返す。

「いえ、この辺りがね」
店員は自分の眉間の辺りを人差し指で擦った。

「先週いらした時より、縦ジワが薄くなって、表情も柔らかくなったような気がしてたんです」

「え、そうかな」
男もつられて、自分の額を擦った。

「ええ。心の中を楽しいことでいっぱいにしておくと、表情も明るくなるんです。それに、ほんの小さなことでも、楽しいことに気づきやすくなるでしょう？」

自分の額に手を当てたまま、男は少し黙った。
この１週間を思い返しているのだろう。

「・・・そんなもんかな」

「そんなもんです」
店員はキッパリと言いきると、男の方へ少し身を乗り出した。

「で・・・」

秘密めかした微笑みを浮かべ、自分の顳あたりを人差し指でチョンチョンと突つく。

「次のお祈りネタ、仕込んであるんですけど。お聞きになります？」

（お祈りネタ、って）
男は思わず吹き出したが、すぐにとびきりニヒルな表情を作った。

「それは是非、聞きたいねえ」

店員も吹き出しかけたが、なんとか真顔に戻ると厳かに言った。

「では。近いうちにあなたは、天狗の一味となり世界に救いをもたらす者となります」

「天狗ぅ？！天狗って・・・あの、天狗？」

思いもよらぬ単語が飛び出し、せっかく作ったニヒルな表情は消し飛んだ。
渋く抑えた低い声も、台無しだ。

店員は、男の反応にシメシメとほくそ笑む。
「そう。あの、天狗」

「で、救世主？」

「そう。救世主、救世主」

半ば呆然としながら 予想もつかない展開のストーリーを聞くうちに、男は魅了され始めていた。

彼女の語る、自分の 突拍子も無いもうひとつの人生に。

「男は、人生に倦み疲れて山へドライブに行くんです。
　自分自身にドライブだと言い訳してるけど、心の底では、全てを捨て去って山奥で人目を忍んでヒッソリ暮らしたいとか、なんならそのまま命を落としても構わない、とか思ってる」

「・・・のっけから、随分物騒ですねぇ」
男はカップを置き、少し身を引いた。

「すみません。でもまあ、お話ですから」

店員は意に介さず、ニッコリ笑った。

「でね、日も暮れかけて、男はだんだん不安になるわけです。
いくら、『死んでも構わない』とか思っててても、やっぱり夜の山は怖いし。
おまけに、食料も水も持って来てないし。

で、ヤケになってさらに奥へと踏み入って行く。
そこで、突然足元が崩れ、転落しかけるんだけど、幸運にも木の根に掴まってぶら下がる」

「ほう。九死に一生だ」

「そう。でも、まだ助かったわけじゃない。なんとかぶら下がったものの、下は崖です。遥か下方にはゴツゴツした岩肌。
男は思わず、助けを求めで叫ぶ。声の限りに」

「そこで？」

店員は頷く。

「そう。そこで、天狗登場」

バサバサッ と、羽音のようなものが聞こえた・・・気がした。

何かが頬をかすめ、わき腹にがっしりとした腕が回されたかと思うと、次の瞬間には樹々の隙間の柔らかな地面に放り出されていた。

男は地面に転がったまま、荒い息を繰り返す。
手は縋るように土を掴み、目はきつく閉じられたままだ。

「やはり、死ぬのは怖いか。愚か者め」

男の顔の近くで、枝を踏む音が聞こえた。

おそるおそる目を開き、声の方を振り仰ぐ。

そこには。

山伏のような服装で、そびえるように仁王立ちしている大男。

いや、人間ではない。
その顔は真っ赤で、あり得ないほど長い鼻を持ち、目は爛々と光っている。

子供の頃に絵本で見たままの、天狗がいた。

男は、気を失った。

目を覚ましたのは、簡素な山小屋の中だった。

囲炉裏の側に敷いた、ムシロの上に寝かされていたのだ。

男は跳ね上がるように身を起こし、壁際まで素早く這い進むと、必死で壁にへばりついた。

囲炉裏を挟んで目の前に胡座をかいているのは、先ほど男を助けた天狗だった。

「そんなに怯えるんじゃないよ。命の恩人に、失礼だろう」

部屋の隅から、嗄れた声が聞こえた。

光の当たらない暗がりから、小柄な老婆がヒョコヒョコと出て来た。
絣のモンペを着て、頭には手ぬぐいを被っている。

土間から畳へ上がり、腰に垂らした手ぬぐいで手を拭きながら、男の方へにじり寄ってくる。

やっとの思いで、男は声を出した。
目は天狗を見据えたままだ。その存在が恐ろしくて仕方ないが、視線を外せない。

「・・・こ、ここは・・・どこですか」

「ここかい。ここは、天空村」

老婆はそう言って、ニンマリと笑った。
「別名、天狗村と言われてるよ」

息をのみ固まる男に、天狗は囲炉裏をまわり込み容赦無く近づき、右の拳を上げた。

「今日一日の記憶を消され、下界に戻り今まで同様に暮らすか」

左の拳も振り上げる。
「この村に留まり、皆と共に新しく生きるか」

両の拳を男の前に突き出した。

「どちらかひとつを選ぶのだ」

「あら、もうこんな時間」

男は腕時計を確認した。もうじき５時になる。

「そんな！これからってトコなのに・・・」

「ごめんなさい。私、ペース配分が下手なのよね。喋るの遅いし」

顔の前で手を合わせ 拝むポーズをしながら、店員は少し早口になった。

「例によって、端折ります。えっと、結局男は、村に留まる方を選ぶの。
記憶を消されるのも、今までと同じ暮らしに戻るのも嫌だったし、もう一度死ぬ気にもなれなかったから。

この村は、実は現代版忍者の隠れ里。修行生活は、早起きして運動・畑仕事や家畜の世話。村の外から仕事を請け負ったりもする。

夕方からは村民みんなが集まって、質素だけど栄養満点の夕食。そのあと少し、寛いで銘々にお喋り。解散して、夜の鍛錬。そして、就寝。そんなシンプルな暮らし」

「現代版忍者か。悪くないね」

男はもう、忍者ぐらいでは驚かない。

「ふふ。そんな暮らしが何年か続いて。ある日、男は再び天狗の訪問を受ける。
あ、普段天狗は、村にあまり顔を出さないの。山のもっと奥に、ひっそり暮らしてる。

でね、天狗は、男にある物を託すの」

「お前に、渡すものがある」

天狗は男を見下ろした。
男はもう、天狗を恐れてはいない。深く敬っているのみだ。

天狗は、小さな革袋を男に手渡した。

「天狗の滋養豆だ」

それは、天空村（天狗村）特産の、豆だった。
この村の人たちの恐るべき身体能力や厳しい鍛錬に耐える力の源は、この豆なのだ。

「何故、これを私に・・・？」

「うむ。お前もそろそろ、鍛えられてきたようだからな。この豆を受け入れられる身体になっているはずだ。

それはな、わしが特別に育て続けた種だ。村で栽培しているものより、強い力を持っている。栄養価も、繁殖力も強い。・・・食べてみろ」

男は初めて、その豆を一粒食べた。
今まで、それを食べることは許されていなかったのだ。

「飲み込むのが早いな。もっとよく噛んで食べないと、充分に栄養を摂れない。もったいないことだ」

男は頷くと、もう一粒食べた。今度はゆっくり、何度も咀嚼した。

「そうだ。そのくらいよく噛めばいいだろう。
特にその豆は、非常に滋養が高いから、ちゃんと噛まないと腹を壊す」

「はい」

「その豆だけではない。我々は、別の生き物を殺して喰っている。自分が生きるために他のものの命を頂いているのだ。だから、食べ物に感謝して充分に味わい、余すこと無く摂取するのが、食べる側の責任なのだ」

「・・・はい」

天狗は語った。

自分はかつて、土であり空であり木であり土であり風だった。
要するに、全ての物であり、また 何者でもなかった。

ある日突然、肉体の枷を着せられ、ここに現れた。

だがそれも、もうすぐ終わる。
自分はこの肉体の寿命を終え、もとの全てに戻る時が近づいている。
肉体は消滅するその前に、遺すべきものを遺すべきものに渡したい。

「あなたは、死を恐れてはいないのですか。寂しくはないのですか」

男の問いに、天狗は笑った。

「恐れ？寂しさ？何故そんな風に思う？

　私はこの身体で、充分生きた。信頼出来る仲間達と共に。
世代交代する彼らを見送りながら、世を継いで私は１０００年も生きた。それは私の誇りだ。

その誇りを持って、また、元の私に戻るだけだ」

「でも私は、あなたを失うのを恐れます」

「そうか。では、覚えておけ。

全てのものは、繋がっている。これからもワシは、お前と共にある。
お前をとりまく自然の中に。お前が殺し食す、食べ物に。お前を潤す水に、宿っているのだ」

「・・・覚えておきます。それから、私の記憶の中に、私の精神の中にもあなたが宿り続けていることも」

天狗は嬉しそうに笑った。

「やはり、お前に豆を渡したのは正解だったな」

「やがて男は、その豆を加工して簡易食品やサプリメントを作り出す。それを食糧難にあえぐ地域へ寄付し、世界を飢餓から救うの」

「・・・ほう。そう来ますか。壮大な話だな」

男は夢みるような表情で言った。

「ふふ。一週間もあったから、いっぱい詰め込んじゃいました」

「・・・ありがたいね。それで、その天狗印の食品なんかと共に、天狗の教えも広めていくわけだね？」

「そうそう」
店員は嬉し気に頷いた。

「でも、様々な企業や国から妨害されるんです。貧しい国から搾取しているようなところから。でもそこで、忍者スキル発動」

「あははは。なるほど！で、村人一丸となって？」
男は手を叩き、少年の様な表情で弾けるように笑う。

「うふふ、その通り。もうそ・・・イメージトレーニングのコツを掴んできましたね？」

危うく吹き出しかけ、男は上目遣いで店員を窺った。
「・・・今さ、『妄想』って言いかけなかった？」

「いえ。言ってません！・・・ギリセーフ、ってことにしといて下さい。・・・あくまでも、お祈り・イメトレですから」

ふたりの笑い声が、店内に響いた。

「あっ！」
店員が、突然声をあげる。

「ん？」

「・・・腹筋と腕立てのところ、話すの忘れちゃった」

悔しそうに言うのを見て、カフェ・オ・レの最後の一口を飲もうとしていた男は、カップの中に吹き出した。

「イヤ、そんな無理に入れなくても」

急いで紙ナプキンを取って、顎に垂れたしずくを拭う。

店員は、頬を膨らませた。
「駄目です。だって、日課だもの」

第三週　フレンチロースト・ナッツフレーバー

カウベルがのどかな音をたてた。

「こんにちは」

店員が出てくるのを待たず、男はカウンター席へ向かう。

「いらっしゃいませ。お待ちしてました」

店員は親しみを込めた笑顔で、メニューと水を運んだ。

「あ、胃は治ったみたいですね」
自分の口の端を指差す。

「おかげさまで」

男はニヤリと笑顔を見せた。

「よく噛んで食べるように、心がけたから。・・・じゃないと、天狗に怒られるからね」

「あはは。天狗、怒らせちゃまずいですもんね」
男の冗談に、楽しそうに笑う。

「胃も治ったことだし、今日はオススメを頼みたいな。先週言ってたヤツ」

「ええ。私のオススメは、これです」

メニューを指差す。

「フレンチローストのナッツフレーバー。酸味は抑えめ、苦みは強めだけどまろやかで、とても香りが深いんです」

「ふうん。美味しそうだ。じゃあ、それをお願いします」

いつも通りの、静かに流れるような手さばきを見守る。

漏斗にお湯が上がると、たちまち良い香りが立ちのぼった。

確かに、今までとは香りが全く違っていた。
その香りを楽しみながら、男は背後の店内を見回した。

「ところでこの店、いつも空いてるみたいだけど、大丈夫なの？』

「うふふふ。大丈夫ですよ。ランチの時はほぼ満席だし、その後も賑わってて。
何故か水曜だけ、お客様がいらっしゃる少し前から・・・んー、５分とか１０分前からかな、不思議と急に、誰もいなくなるんです」

「へえ・・・そうなんだ。もしかして、営業妨害かな」

「そんな。いい休憩になって、ありがたいです。ふふ」

「なんか、まるで・・・俺のための店みたいだ。少なくとも、この時間だけは」

照れ隠しのように、男は鼻の下を人差し指で擦った。

店員は、静かに笑った。
「うふふ。そうかもしれませんね、ホントに」

彼女の表情が少し寂しげに見えたのは、気のせいだろうか。

「この一週間、楽しいことありました？」

そう訊ねた店員の表情は、いつもと同じに明るい微笑みをたたえていた。

「それがさ・・・」
男は、ため息混じりに苦笑いをする。

「休みの日、山、とまではいかないけど、久々に大きい公園なんかに行っちゃったよ。ちょっと家から離れてるんだけど、緑が見たくなってね」

「いいですねえ」

「うん。遊歩道とか、並木道とか。小さな池や雑木林なんかもあって」

男は視線を落とし、テーブルの上の自分の両手を見つめた。

「昔、結婚してた頃にね・・・一度だけ一緒に行ったことがあったんだ」

「そうでしたか」

「ん・・・あのさ。もしかして、俺がバツイチなの、気づいてた？」

目を上げた男と視線が合うと、店員は曖昧に微笑んだ。

「ええ・・・まあ、なんとなく。指輪の跡がね、うっすら残ってるから」

男は、『お祈り』の内容を何度も思い返すうち、最初の話が「出会い」だったのに思い至ったのだった。
少なくとも、既婚者相手にそんな『お祈り』はしないだろう。

「なるほど。鋭い観察眼だ」
男は自分の両手をまじまじと眺めた。
確かに、左手の付け根の辺りが右手よりほんの僅か、細くなっている。

「指輪を外したの、だいぶ前なんだけどなぁ。よく気付いたね」

カップに注ごうとしていた店員は、フラスコを持ったまま手を止めた。

「ごめんなさい。詮索するつもりじゃなかったんですが」

「イヤイヤ、そんなつもりで言ったんじゃないから。ホントに、感心してるだけ」

大体自分だって、とやかく言えた義理ではないのだ。
初めてこの店に来た時に、店員の左手の指輪を確認しているのだから。

「それでさ」
気兼ねする必要など無いことを示すように、男は急いで話を継いだ。

「帰りに偶然通った花屋に、ヤツデの小さい鉢が売ってて」

「あははは。天狗の葉団扇ですね。・・・まさか？」

「うん。買っちゃった」

ふたりはまた、声を合わせて笑った。

「自分でも、影響され過ぎだと思うけどさ。なんか、単なる偶然とは思えないっていうか。素通り出来なくて」

「あれ、１メートル以上に育つんじゃなかったかしら。大丈夫なんですか？」

「剪定すれば小型のまま育つらしいよ」

「そっかぁ。ま、ヤツデは魔除けや邪気払いにもなるらしいし。いい買い物だったかもしれませんね」

差し出されたカップに添えられているのは、ナッツのクッキーだ。

「お待たせ致しました。フレンチロースト・ナッツフレーバーです」

第三週　予言

「ああ・・・これ、旨い！」

おすすめのコーヒーを一口飲んで、男は驚きの声を上げた。

様子を見守っていた店員が、顔をほころばせる。

「よかったぁ。私も大好きなんです。ローストの具合だけじゃなく、豆のブレンドも工夫しているらしいですよ」

もう一口、男はゆっくりとコーヒーを啜る。

「そうなんだ。香りもいいし、これ、すごく気に入った」

店員はやはり、静かに静かに、器具を片付ける。

「もしよろしければ、グラム売りでお譲り出来ますよ」

「そっか。・・・でも、いいや。家でも飲んだら、飲み過ぎてまた胃を悪くするし」

男は歯を見せずに、ニッと笑った。

「それに、ここで飲んだ方がきっと旨いから。楽しいお祈りも聞けるしね」

店員は、少し目を伏せるようにして微笑むと、顔を上げて言った。

「では、今週のお祈りを。・・・あなたは近いうちに、美しき女性エージェントと共に闘い、悪の秘密結社から世界の自由を守ります」

「・・・ハァ・・・」

身構えて聞いていた男は、とうとうため息をついて肘をついた手に額を預けた。

「あら。イマイチ？」

布巾でソーサーを拭いている店員の手が止まる。

「イヤ、そうじゃなくて。いちいち想像を超えてくるからさ」

力が抜けたように笑いながら、顔を上げて頭を掻いた。

「いくらなんでも、不惑のオッサンが悪の秘密結社と闘うとか・・・」

「あら、意外。もう少しお若いと思ってましたけど。不惑でしたか」

拭き終えたソーサーを棚に並べ、布巾の皺をパンッと伸ばす。

「でも。」
ピンと張った布巾で顔の下半分を隠すようにし、目だけ覗かせて言った。
昔見たアニメの、アラビアンナイトに登場するお姫さまを思い出させる。

「楽しいことが起きるのに、年齢なんて関係ありません。問題は、起きたことを楽しいと感じられるかどうかでしょう？」

そして片手をパッと放すと、くるくるともう一方の指に布巾を巻き付け、ニッと笑う。

「これで驚いてる場合じゃありません。今回は、超盛りだくさんなんだから」

男は両手を上げて、バンザイした。

「降参です。黙って拝聴します」

おどけてみせた男だったが、実は密かに嬉しく思っていたのだった。

一週間かけて、奇想天外なストーリーを事細かに考え続けてくれる人がいること。

自分を楽しませるために。
そして、自分の人生が楽しいものであるよう祈るために。

誰かが、自分の幸せを祈ってくれている。
そう思うだけで、心の中に暖かい光が満たされてゆく気がするのだ。

ちょうど、柔らかなはちみつ色の西日が この店内に溢れているように。

第三週　物語（１）

マンションの集合ポストから郵便物を取り出すと、男は持っていた鞄を探った。

薄暗い外廊下を歩く。節電のため電灯を減らしてあるのだ。
鍵を取り出し部屋の玄関を開けた、その時。

脇の下をくぐって、何かがするりと玄関へ滑り込んだ。

「なっ・・・」

怯んだ男の腕をグイと引っぱり、中へ引きずり込むと、そいつは急いでドアの鍵を閉めた。

引きずり込まれた勢いで玄関に倒れ込んだ男が振り返ると、ドアの前にうずくまっている影が見えた。

男が発する前に、相手が顔を上げた。

「ごめんなさい。手荒なことをしてしまって」

狭い玄関の中、薄暗がりの下でもわかった。
鋭い目つきの、しかし息を呑むほどの美しい女だった。

尻餅をついた姿勢のまま動けずに居る男に、女は苦痛の表情を見せた。

「少しだけ。ほんの数分でいいから、ここに居させて欲しいの」

緊張した声でそう言って、肩を押さえる。

「・・・怪我、してるんですか？」

「少しだけ。でも、たいしたことない」

押さえた手の下から、血が滲み出しているのがわかった。

「どうぞ、入って下さい。治療しましょう」

男は立ち上がると靴を脱ぎ、先に中へ入った。

「いえ、いいの。ここにいるだけで・・・」

部屋の入り口で、ふと立ち止まる。

「電気は？」

「え？」

「追われてるんでしょう？電気は、点けてもいいの？」

「え、ええ。なるべく、普段通りにしていて下さい」

男は電気を点けると、まっすぐにクローゼットへ向かい救急箱を取り出し、女の元へ戻った。

「上着を脱いで」

女は身を捩り顔をしかめながら、上着を脱いだ。

「うわ・・・ひどいな」

男が思ったより、ずっと酷い傷だった。

「大丈夫。利き腕は無事だから、自分で処置出来る。それ、貸してもらえますか？」

男が救急箱を差し出すと、女は着ていたＴシャツを肩口から破き、テキパキと傷の治療を始めた。

「・・・何も聞かないのね」

「聞かない方がよさそうだから」

肩に包帯を巻きながら、女は不敵な笑みを見せた。

「正解。賢いのね」

あっという間に手当てを終えると、先ほど脱いだ上着と破り捨てたシャツの片袖とをぐるぐる巻きにしてまとめ、玄関の床に僅かに付着した血を拭う。

「あ、いいよ。そのままで。後で拭いとくから」

「いえ。私がここに居た痕跡を残したくない。あなたに迷惑はかけられない」

抑えた声で言いながら後始末を終えると、玄関のドアに耳をそばだて外の気配を窺っている。

男はまたクローゼットへ向かい、戻って来た。

「あの・・・これ、よかったらどうぞ」

女が振り返る。

「それ、もう着られないでしょ？肩のトコ斬られてるし、血だらけだし」

差し出された手には、デニム地の上着とシンプルなＴシャツ。

「でも・・・」

女が躊躇すると、男はさらに腕を突き出した。

「この寒いのに、片袖のＴシャツとストレッチパンツだけでウロついてたら 目立ってしょうがないんじゃない？」

「おおお。なんか、クールだ」

「ふふふ。今回は、ハードボイルド調に攻めてみました」

「さすが、妄想師匠。変幻自在だねえ」

「も、妄想じゃありませんてば！お祈りです！」

タン！と足を踏みならし怒ったフリをすると、店員は手元のカップを口に運んだ。
その口の端には、笑いが滲んでいる。

「あははは。ゴメン、ゴメン。謝るから、お祈りの続きをお願いします」

男はギュッと目を瞑り手を合わせて拝んだが、すぐに片目だけ開けて店員の顔色を窺う。

店員はわざと、やれやれというふうに肩をすくめてみせた。

これではどちらが年上だか、わからない。

第三週　物語（２）

「助かったわ。本当に、ありがとう」

そう言い残して女が出て行ったのが、数時間前。
朝になってみれば、夢の中で起きたことの様だった。

だが、現在自分が感じているこの痛みは、残念ながら夢ではなかった。

「さっさと吐け。あの女はどこへ行った。何を喋った」

男は椅子に縛り付けられたまま、床に唾を吐いた。
殴られた時に口の中を切ったため、血が混じっている。

「だから、知らないって。傷の手当てをして、出て行っただけ。なんかヤバそうだったから、敢えて何も聞かなかった」

男の向かいに座った小柄な男は、何も言わない。

どこかの廃工場。
屈強な男達に囲まれ、睨み下ろされていた。

ゴリラのような男が、スーツの胸元に手を差し入れた。

「待て。撃つんじゃない。騒ぎがデカくなる」

向かいに座った小柄な男が、初めて口を開いた。

「わかってます。コレですよ」

ゴリラ男が内ポケットから取り出したのは、スタンガンだった。
このスタンガンで、男は通勤途中に襲われここに連れて来られたのだ。

先端から、バチバチッと青い光が走る。

「待て。待ってくれ。本当に何も知らないんだ。あの女が勝手に転がり込んできて、出て行っただけだ。俺は何もしていない。巻き込まれただけなんだってば」

あんなもの、もう二度と喰らいたくない。
男は必死に弁明した。

「何もしていない？」

小柄な男が椅子から立ち上がった。

「女を部屋に入れただろう。そして、傷の手当ても。すぐに追い出していれば、あの時我々が捕まえることが出来たのに」

男の前まで来て、立ち止まった。

「それがお前のした選択だ。自分の下した判断と行動には、相応の責任をとってもらう」

何の予備動作も無く、いきなり腹を蹴られた。
男は椅子ごとひっくり返り、後頭部を床に打ちつけた。

「ぐぁ・・・・」

まともに声も出ないほどの衝撃と、痛み。

「ちょ、ちょっと。・・・俺、かなり酷い目に合わされてるんですが」

「だって、ハードボイルドですもの。多少のバイオレンスは、やむなし」

店員は、事も無げに言う。

「イヤ！やむなし、じゃないから。俺、痛いの嫌いだから。楽しくないから」

「まあまあ。ここからがカッコいいんですって」

手をヒラヒラさせて笑うと、店員は再び話し始めた。

床に倒れた男を見下ろし、小柄男は淡々と話し掛ける。

「今、お前のことを調べさせてる。家族のこと、お前の恋人のこともだ。いつまでも隠し事をしてると、彼らが不愉快な目に合うことになる」

男は恐慌状態に陥った。

「やめろ！他のヤツは関係ないだろ！！」

「なら、早く喋るんだな」

こいつら、何を言っても駄目だ。全く信じてくれない。
一体、どうしたらいいんだ・・・！！

男は目を閉じた。

誰か、助けてくれ！！村のみんな！！天狗さま！！
頼む、助けてくれ！！！

必死でそう祈った時だった。

「その人、本当に何も知らないわよ。私、何も話してないもの」

昨夜の女だった。

「もう放してあげてよ。かわりに私が捕まるから」

その場に居た男達の、全員の動きが止まった。

呆然とする男達の中を女は悠々と歩き、床に倒れた男を縛り付けていた縄を解いた。

「悪かったわね。あなたに迷惑かけたくなかったんだけど」

まだ立ち上がれずにいる男に構わず、女は椅子を立てるとそこに腰掛け挑発するように足を組んだ。

「で？どうするの？私も縛るわけ？」

最も早く立ち直ったのは、小柄男だった。

「アンタには、これからゆっくり話を聞こう。だが、そっちの男も帰すわけにいかない」

それを聞くや否や女は立ち上がり、倒れている男を庇うように立ちはだかった。

「この人に、これ以上手出しはさせない」

周りの男達が、殺気立った。

そのとき。

天井付近の窓の辺りから、声が聞こえた。

「おせーよ。なんかあったら、すぐに呼べって言ったろ」

空から、いや、天井や窓から、次々に人が降ってきた。

「お・・・お前ら！！」

それは天空村の人々、天狗の弟子達だった。

「えええ！！！前の話と、繋がってたの？！」

驚いて声をあげた男に、店員は得意気に笑ってみせる。

「うふふ。繋げてみました。なかなかの力技でしょ？」

「あーあ、こんなにやられちゃって。ダッセーの」

指差して笑うのは、二十歳そこそこの青年だ。

「ちょっと時間かかっちゃったわね。探すの手間取っちゃって。ごめんねー」

ごめんと言いながらニコニコしている、３０台前半と思しき女性。

「お前ら！！！何者だ？！」

「・・・この男の仲間だ。そこのお嬢さんじゃないが、こいつに手出しはさせない」

リーダーの言葉で、忍者達が一瞬でフォーメーションを変えた。

戦闘開始だ。

「おおおおおお！！！かっこいい！！」

「でしょ、でしょ？この後、すごいかっこいい戦闘シーンが繰り広げられます。で、もちろん忍

者達が勝つの。そして、ヨレヨレになった敵のボス、あ、小柄男ね。彼に一本の電話が入る」

「何？七星製薬の孫娘？！・・・わかった」

「ひかりさんに、手を出すな！彼女は関係ないだろ！」

小柄男は、苦虫を噛み潰したような表情で言った。

「お前の恋人が、七星製薬の孫娘だったとはな・・・」

殴り掛かろうとする男の肩に、後ろから手がかけられる。

「心配するな。既に護衛を張りつけてある。もちろん、極秘裏に」

昨夜の女が声を立てて笑った。

「あら、アンタ達、命拾いしたじゃない。あそこの孫娘に手出ししたなんてことになったら、アンタ達の雇い主も卒倒するんじゃないの？」

「最初の週の話も？！繋がってるの？！」

「ふふふ。スゴいでしょ？」

「すげえ！すげえ！！」

男は興奮して目を輝かせている。その表情は、本当に少年の様だった。

「男はね、山から下界に降りてきて、ある製薬会社に話を持ちかけてサプリなんかを開発したの

。それが七星製薬で、牛丼屋で出逢ったお嬢様の祖母が会長なんです。要するに、お嬢様の仲介があったわけね」

「悪の秘密結社と女エージェントは？」

「悪の秘密結社はね、裏でいくつかの企業や宗教団体が手を結んで、人々から巧妙に自由意志を奪い、自分たちに有利な世界を作ろうとしてる。
小柄男が言ったこととは裏腹に、”自分で意思決定させないのに、その責任だけは人々に押し付ける”ような社会ね。

極秘の不正取引だったり、極度にソフィストケイトされた洗脳だったり、煽動や詐欺や暴力、いろんな方法で人々を惑わせ、徐々に徐々に自分達に従わせていく。

で、それに対抗しているのが、彼女達エージェント」

「おおお。なんか、ちょっとありそうだよね。実際に」

「かもしれない」

「俺に、何か手伝えることは？」

小柄男達が退散した後、女から彼らの正体を聞いた男は義憤に燃えて言った。
そんな社会は、許せない。正義感の強い男なのだ。

だが、女は笑い飛ばした。

「アナタが？冗談でしょ。そんなへっぴり腰じゃ、話にならないわよ。コッチの人達なら・・・」

と、忍者達に目を配る。

「ちょっとは頼りになりそうだけど」

「このオッサンはさ、まだ見習い中だから。基礎連だけで、実践してねーから」

得意気に胸を張る若者の頭を小突き、リーダーが進み出た。
女に小さなカードを手渡す。携帯電話の番号だけが印刷されたカード。

「仕事の依頼があれば、ここに連絡を。ただしその場合、アンタらのことを調べさせてもらう。
受けるかどうかは、それから決める」

女は頷いて胸ポケットにカードをしまった。

「ねえ、アナタ達が来たとき、この人驚いてたけど・・・」

男は我に帰った。

「そうだ！なんでここがわかったんだ？それに、攫われたことも」

「決まってるじゃない。あなたが呼んだからよ」

天気の話でもするような口調で言うのは、先ほど笑顔で謝っていた女性だ。

「え？呼んだ？・・・俺が？」

「でも、一度しか呼んでくれなかったから、辿るのが大変だったわよ」

「そう。彼女がいなかったら、辿り着けなかったかもしれない。彼女は聞くのが得意だから」

リーダーに褒められて誇らしげに微笑む女性を横目で見やりながら、若者が拗ねたように言う。

「だから、何かあったら呼べって言っといたのによー」

「待ってくれ。意味がわからない。たしかに俺、助けてくれって思ったけど・・・」

「ほーら、やっぱりわかってないよ。しょーがねえなあ」

やれやれ、と殊更にあきれ顔で、若者はしゃがみ込んだ。

「『すべてのものは、繋がっている』、天狗さまの言葉を忘れたか？その気になれば、居場所ぐらい辿れる。訓練を積んだもの同士なら」

リーダーは男の肩に手をかけた。

「あの言葉は、比喩なんかじゃない。現実に、世界は繋がっているんだ」

「今週のお祈りは、こんな感じです」

店員は、「ふー、長かった。疲れたぁ」と言いながら自分のカップを取り上げ、ごくごくと飲み

干した。

男は口を薄く開いたままその様子を見つめていたが、実際には何も見ていなかった。

しばらくの間黙っていたが、やがて一口水を飲むと、ようやく口を開いた。

「現実に、世界は繋がっている・・・・本当に、そう思ってるの？」

店員がこちらを真っすぐに見つめたのが、気配でわかった。

男も焦点を合わせ、店員を見つめ返す。

「もちろん。でなきゃ、お祈りなんてしません」

柔らかな表情に、静かな声。
しかし、そこには何かを確信している強い響きがあった。

「つよく、とてもつよく祈れば、祈りは届きます。祈った相手が、それを知らなかったとしても。
どんな形で届くかはわからないけど、なんていうか、プラスの波動？そんな感じで届く。と、私は思う」

男はやがて、見つめ合っていた視線を外した。

「もし祈りたい相手がいるなら、その人の笑顔をイメージするといいです。
その人が、いつもその笑顔でいられるように。幸せでいられるように、祈るんです。もし・・・」

声が、少し笑いを含む。

「私は、お祈りが無意味だなんて、ひとかけらも思ってないけど。

でも、もし効果が無くても・・・別に、誰かの害になるわけじゃないでしょう？」

「ん・・・まあ、確かに」

視線を手元に彷徨わせたまま、男は呟いた。

「それにね、『誰かの幸せを本気で祈ることが出来る、ちょっと良い人っぽい自分』を確認することが出来る、という 悪くない特典付きです」

店員は、自分自身を茶化すように笑った。

第四週　ハス茶

もうすっかり、耳に馴染んだカウベルの音。

「こんにちは」

「いらっしゃいませ。・・・今日も貸し切り状態ですよ」

店員は笑いながら、グラスに水を注いだ。

先週、男が「俺のための店みたいだ」と言ったのを憶えていたらしい。

「あはは。贅沢だねえ」

男はいつもの席に座った。

「えっと、フレンチローストでいいのかしら？」

「うん。お願いします」

もはや常連扱いだ。

男はいつものように、しなやかな一連の所作を見守る。

「あのさあ、その・・・おねえさん、踊りかなにかやってました？」

「え・・・？いえ、特に」

不思議そうに顔を上げた店員に、男は慌てて手を振った。

「いや、すみません。なんとなく、ね。あの・・・コーヒーを淹れてる時の動きがさ、日舞とかバレエとか、そういうのを思い起こさせるっていうか」

店員は、はにかむように笑った。

「わあ、嬉しい。えっと、踊りはやってませんが、学生の頃は弓道をやってましたね」

「ああ、なるほど。背筋が伸びてる感じは、そこからか」

「ふふ。伸びてます？」

「伸びてます、伸びてます」

漏斗の中をそっとかき混ぜると、深いコーヒーの香りが立ちのぼった。

「それから、喫茶店のアルバイトも長くやってたので、慣れてるんです。別の店なんですけどね。とにかく、コーヒーが好きで」

「なるほど。じゃあ、コーヒー飲み放題ですね」

「それがね、」笑いながら火加減を調節する。
「飲み過ぎて胃を壊してしまって。今は一日一杯だけ」

「あはは。ああ、それで、前に俺が胃が弱ってたとき、気づいてくれたんだ」

「ふふ。胃を壊すと、辛いですからねえ」

男の前に、湯気の立つカップが差し出される。

「お待たせ致しました。フレンチロースト ナッツフレーバーです」

「ありがとう」

ゆっくりと香りを楽しんでから、ひとくち。

やはり、とても美味しい。

男は満足気にカップを戻すと、「そうだ」と顔を上げた。

「俺ね、とうとう始めちゃいましたよ。腹筋と腕立て」

「え、」と動きを止めた店員と目が合い、同時に笑い出した。

「あははは！やったあ！お祈りが通じましたね」

「バッチリ通じましたよ。だってさあ、ああまで言われちゃ、もうやらなきゃしょうがないじゃん？」

先週のお祈りの中で、男は悪の組織から殴る蹴るの暴行を受けていた。

店員は、男の帰り際に笑顔でこう言ったものだ。

「一応、バイオレンスシーンは外してお祈りしておきますけど・・・誰かに殴られたりしないといいですね」

自分で考えたお話なのに、なんて言い草だ。そう言いながらも、男も思わず笑ってしまったのだった。

「昔、スポーツやってたころは、２～３００回は平気で出来たんだけどなぁ。今やってみたら、５０回でも結構キツかったよ」

「ふふふ。頑張ってくださいね。・・・最終的には、樹の枝に足首の力だけでぶら下がって腹筋するまでになるんですから」

「えぇっ？！なんか急にハードル上がった！」

のけ反って背もたれに寄りかかる男を見下ろし、店員はクスクス笑う。

「いま、決めました」

「ドSだ。・・・・この人、ドSだ。うー、怖い怖い」

男の怯えたフリをわざと無視し、店員は鼻唄を歌いながら自分のカップを口に運ぶ。
口元には ほのかに笑みが浮かんでいる。

「あ、それ。何飲んでるんですか？なんか、いい香りがする」

「これ？ハス茶です。最近教えてもらって、お気に入りなの。飲んでみます？」

「え、いいの？」

お湯をはったバットから、温まったカップを取り出す。

「もちろん。これは自前のお茶ですし。ついさっき淹れたばかりだから、まだ温かいはず・・・」

男の前に差し出されたお茶は、黄色に薄く色づき澄んでおり、爽やかな香りを放っている。

「蓮の葉を乾燥させたものと、緑茶の葉に蓮の花の香りを移したものをブレンドしてあるんです。美容効果があるらしいですよ」

第四週　予言

「美容効果ねえ・・・」

男は疑わしげに呟きながら、おそるおそるハス茶をひとくち含む。

「あ。美味しい」

店員は嬉しそうに自分のカップを取り、改めて香りを嗅いだ。

「でしょ？ほんのり甘くて。香りが華やかで」

「うんうん。ハーブティーってやつ？初めて飲んだけど、悪くないね」

「健康にもいいですしね。たしか、コレステロール値を下げたりデトックスの効果もあるとか」

「へえ。優秀だね」

感心しながら、もうひとくち。

「そういえば、ヤツデの葉もお茶に出来るらしいですよ。あんまり飲むとお腹壊したりして危険らしいですけど」

「・・・気をつけます」

「あと、入浴剤にもなるんですって」

「なんか、色々詳しいですねえ」

店員は照れたように笑った。

「ヤツデを買われたって聞いて、なんか責任感じちゃって。調べました」

「そんな。いいのに。俺が勝手に買ったんだから」

済まなそうな表情を浮かべた男に、店員はひらひらと手を振った。

「あははは。いえ、ついでなんですけどね。
ハス茶を知ってから、ハーブティーに興味が湧いちゃって。
ハーブティーって、数えきれないぐらい種類があるんですよ。
それでね、調べものついでに、ヤツデ情報も」

「なるほどね。じゃあ、もしかして、今日のお祈りにはハーブが登場したり？」

期待を込めた眼で見上げられ、店員は申し訳なさそうにため息をついた。

「あぁー、すみません。実は、今日はネタ切れなんです・・・」

「え～！そんなあ・・・一週間、楽しみにしてたのになあ」

「先週で全部のお話を繋げちゃったから、なんか完結してしまって」

あからさまに肩を落とす男に、店員は首をすくめるようにして頭を下げた。

「そっかあ。確かに、超大作だったもんなぁ。でも、残念だなぁ」

男はコーヒーを口に運ぶと、カップ越しにチラと店員を見上げた。

店員が小首を傾げ、「んー・・・」と唸りながら口元に軽く握った手を持ってゆき、その肘を左手で抱え込んだからだ。

初めての予言のとき、彼女がしていたポーズだ。

「じゃあ・・・こんなのはどうでしょう」

とある喫茶店。

疲れた表情の男が来店する。

そんな男に向かって、店員は「楽しいことが起きるお祈り」と称し、現実離れした”男のもうひとつの人生”を物語る。

あり得ないような展開が楽しくて、男は次の物語を心待ちにするようになる。

だがある日、店員は言う。

「もう、作り話はおしまい」

物語を楽しみにしていた男は、嘆く。

すると、店員は言った。

これからは、自らの頭で物語を紡ぎ、自らの言葉で明日への希望を語り、自らの手で未来を拓くのだ、と。

男は動揺する。

彼女の様には語れない、自分に物語など作れるはずがない、と肩を落とした男に、店員は言葉を掛けた。

「・・・諦めたら、そこで試合終了だよ」

「っだはははははは！！！パクリ！！パクリじゃん！！ここで！そう来る！！」

顔中笑いジワだらけになりがら、男は腹を抱えて笑った。
座ったまま足をジタバタさせている。

「せっかく、神聖な気持ちっていうか・・・俺、感動しかけてたのに・・・ひでぇ」

店員の最後のセリフは、某有名バスケマンガからの引用だったのだ。

「うふふ。世代的に、絶対ご存知だと思ってました。良かったぁ」

店員も一緒になって笑っている。

「まさか安西先生を持ち出してくるとは・・・ふぃ〜、ハラ痛ぇ・・・」

男は人差し指で目尻の涙を拭った。逆の手では腹を擦っている。

「名言は、色褪せないものですねえ」

息も絶え絶えといった様子の男を尻目に、店員はまるで他人事の様にそう言うと、優雅に微笑んだ。

第四週　男の物語

「さんじゅうご、さんじゅうろく、さんじゅうしち・・・・」

男は腹筋をしていた。

仕事を終え家に帰り着き、部屋着に着替える。
PCを起ち上げる間に手洗いなどを済ませ、メールのチェック。
それが済むと、夕飯前の腹筋・腕立て伏せ。

今では日課になりつつある。

「よんじゅうに、よんじゅうさん・・・・」

腹筋を続けながら、男は焦りを感じていた。

思い出せないのだ。

「今日から、筋トレをしている間中 祈ろう」と決めたのに。

全く、思い出せないのだ。

数年前に別れた、元妻の笑顔を。

「・・・・ご、じゅう」

腹筋を終え、男はため息をついた。

結局、最後まで思い出せなかった。

結婚生活の最後の数ヶ月、ふたりの間はかなり冷えきっており、ろくに話もしなかった。

話す時も事務的な内容ばかりで、笑い合うことなどあり得ないような雰囲気だったのだ。

昔はよく笑う女だった。たしか、そうだった筈だ。

彼女はいつから笑わなくなったのだろう。
それすらも、思い出せなかった。

「いち、にぃ、さん・・・・」

男は身体を反転し、腕立て伏せを始めた。

元妻のことを考えるのは、久しぶりだった。

あの喫茶店で、店員が「祈りは通じる」と言い切ったとき。

あのとき一瞬、元妻の顔がよぎった。
いつだってウンザリさせられた、死んだような表情。

辛気くさくて鬱陶しくて、目も合わさなかった。
彼女の方でも、いつも視線を逸らし続けていた。

正式に離婚の手続きを終えたとき、男は清々したものだった。

これで面倒なことに煩わされずに、仕事に専念出来る。そう思った。

だが現実は、そうはいかなかった。

これまでジワジワと落ち続けていた業績が、不況のあおりを受け、さらに落ちた。

仕事の不調を 家庭でのストレスのせいだと決めつけていたのだが、そうではなかったことを思い知った。

いや。本当はわかっていたのだ。心の奥では、気づいていたのだ。

思うようにいかない憤りを、妻にぶつけていると。

それでもさすがに、妻を直接罵ったりということはしていなかった。
だが、不機嫌な表情で黙り込んだり、話し掛けられても適当にあしらったり、頻繁にため息をついたり。

彼女がそんな状況を改善しようと努力しているのは、わかっていた。
が、男はそれも無視した。彼女のその努力すら、煩わしかったのだ。

そんな日々を送るうち、彼女から表情が消えた。
コミュニケーションをとろうとする努力が消えた。

それは、明らかなSOSだったはずだ。

だが男は、そのシグナルもやはり無視した。
自分のことだけで精一杯だったのだ。

やがて彼女は、全てを諦めた。

「よんじゅうご、よんじゅうろく・・・」

離婚してすぐ、部署を異動させられた。
望まぬ仕事に情熱を持てず、上辺だけのやる気で仕事をする日々が続いた。

しばらくするとまた、異動させられた。

もはや、惰性で仕事をするようになっていた。

そんな生活を、男はずっと自分に言い訳しながら送ってきた。

妻のせい、不況のせい、不器用な同僚のせい、取引先の頭の悪いアイツのせい・・・・

だから、祈ろうと思ったのだ。彼女の幸せを。

こちらから連絡することは出来なかった。
彼女は新しい生活を始め、新しい家庭を築いている。

だからせめて、陰ながら祈ろうと決めたのだ。
彼女がいつも笑顔でいられるように。

今日の店員の言葉に、男は眼を開かされ背中を押された気がした。

「これからは、自らの頭で物語を紡ぎ、自らの言葉で明日の希望を語り、自らの手で未来を拓くのだ」

「・・・諦めたら、そこで試合終了だよ」

それまでのシリアスな話の流れと、あまりにも有名な名言のギャップに大笑いしてしまった男だったが、時間を経て思い返すにつれ、男は様々なことに気づいたのだった。

『幸せに生きてゆくこと』を諦めていたことに。
その、人として当然の権利を放棄していたことに。

それに気づいたとき、男はため息を禁じ得なかった。

（俺はいつでも、だいぶ後になってから大切なことに気づくんだ・・・）

でも、まだ手遅れじゃない。
今からだって、自分の人生を立て直すことが出来るはずだ。

それには先ず、自らの過ちを清算しなくてはならない。

もちろん、祈ったぐらいで罪滅ぼしになるとは思っていない。
何も変わらないかもしれない。

だが、それでも。祈ろうと決めたのだ。

「ご・・・じゅう、っと」

だが。

腕立てを終わっても。

・・・男には、彼女の笑顔を思い出すことが、出来なかった。

（つづく）

第五週　最後のオーダー

いつもと変わらぬカウベルの音。

だが、「いらっしゃいませ」と掛けられた声は、別人のそれだった。

男は、既にいつもの席に向かいかけていた足を止めた。

「あれ？いつもの方は・・・？」

「彼女は、辞めました」

グラスに水を汲みながら答えたのは、白髪の痩せた男性だ。
黒いパンツに黒のベスト。深緑色のカフェエプロン。

「え。・・・・ああ・・・そうですか」

先週のお祈り。

後になって何度も思い返すうち、なんとなくそんな予感はしていたのだった。
そして、彼女がほんの一瞬見せた、寂し気な表情。

あの時点で既に、店を辞める事は決まっていたのではないだろうか。

男は密かにため息をつきながら、いつもの席に座った。

白髪の男が、テーブルに水を置いた。

「ご注文は、フレンチロースト・ナッツフレーバーでよろしいですか？」

「え？」

男は驚いて見上げた。

「彼女から聞いております。水曜４時、Ｃ２・・・失礼、カウンター２番のお席のお客様。フレンチロースト・ナッツフレーバーをお好みだと」

白髪の男性は、もの柔らかな笑顔で頷いた。

「あ・・・・ええ。じゃ、お願いします」

「かしこまりました」

白髪の男性は軽く一礼すると、カウンターの中へと戻って行った。

「では、あなたがここのマスター？」

「ええ。と言っても、今月いっぱいまでですが」

ゆったりとした仕草でコーヒーの準備をしながら、マスターは微笑んだ。

「残念ながら、この店をたたむ事になっておりまして」

驚きの声を上げた男に、マスターは済まなそうに眉尻を下げる。

「２年前に、連れ合いを亡くしましてね。ひとりで店を切り回すのは、思った以上に骨の折れるもので」

「ああ・・・それは、残念な事でしたね」

「恐れ入ります。おかげさまで、長く苦しまなかったのが幸いでした」

コーヒーの心地よい香りが立ちのぼる。

マスターのコーヒーの淹れ方も、美しく滑らかだった。
あの女性店員とは全く異なる種類の、職人気質が感じられるような美しさだ。

「今週末が妻の誕生日なので、そこでおしまいにしようと」

「そうですか。寂しくなりますね」

マスターは顔をほころばせた。

「そう言っていただけると、長年頑張った甲斐があるというものです」

男の前に、コトリとコーヒーが置かれた。

「お待たせ致しました。フレンチロースト　ナッツフレーバーです」

第五週　手紙

「それから・・・・」

男が感慨深くコーヒーを啜っていると、マスターはカウンター越しに封筒を差し出してきた。

「彼女から預かっていたものです。お客様に渡して欲しい、と」

「え・・・なんだろう？」

不思議に思いながらも封筒を受け取る。

『水曜４時・Ｃ２のお客様へ』

隅に花の模様が浮かび上がっているシンプルな白い封筒には、それだけが書かれていた。

糊付けされていない封筒を開き、手紙を取り出す。

同様にシンプルな白の便箋。
右下にはやはり、花の模様が浮き出ている。

開くとそこには、達筆とは言わないが、読みやすい綺麗な文字が並んでいた。

前略

水曜４時・Ｃ２のお客様。

お名前を存じ上げないので、このように呼ばせていただきますこと。
また、きちんとご挨拶もせぬまま、店を辞めてしまったこと、どうぞお許し下さい。

実は、辞める事はだいぶ前から決まっていたのですが、私はお別れが苦手なのです

。本当に、苦手なのです。

コーヒーもお 祈 りも楽しみにして下さっていたのに、とても残念です。

私の淹れるコーヒーを、拙い空想を、楽しみにして下さる方がいること。
それは私にとって、とても励みになりました。大きな喜びでした。

本来なら、きちんとお礼を申し上げたかったのですが。
また、そうするべきなのでしょうが。

せめてこのような形で、お礼を言わせて下さい。

コーヒー、気に入って下さってありがとうございました。

お 祈り を聞いて笑って下さって、ありがとうございました。
お客様が笑って下さる度、私も楽しい気持ちになれました。

これからも、あなたとあなたの周りの方々に、笑顔が溢れますように。

そして、あなたのお祈りが、ちゃんと相手の方に届きますように。

お節介は承知しておりますが、心よりお祈り致します。

どうぞ、お元気で。
特に、胃腸と腹筋と上腕二頭筋の健康には、くれぐれもご留意を。

かしこ

緑川 ゆり

最後の一文で、男は思わず吹き出した。

手紙を畳み封筒へと戻しながら、苦笑いする。

（まったく・・・この人は、最後にふざけなきゃ気が済まないんだろうか）

「楽しい手紙でしたか」

マスターが、洗い物をしながらニコニコしている。

「・・・ええ。とても」

男はクスクス笑いながら、手紙を内ポケットにしまった。

「つくづく、変な人だ」

「ハハハ。そうですね。確かに、少し変わった子です。でも・・・」

濡れた手を拭きながらマスターは、親戚の子供か自分の教え子を自慢するような表情で笑う。

「相手がどんな言葉を欲しがっているか、相手にとって本当に必要なのはどんな言葉か。そういった事を、全て知っているような。
そんな、不思議な子だ」

マスターの言葉が、すっと胸に入ってきた。

確かに、そのとおりだった。

最初にこの店に来たとき、男は自分の人生に対する興味を失っていた。

彼女は、明日を迎えるのが楽しみになるような物語をくれた。

次の週、「全てを捨て去ってしまいたい」と、それまで密かに思っていたことをズバリと言い当てられた。
男は心の奥を見透かされた気がして、内心ヒヤリとしたものだった。

そして彼女は、生命の繋がりや、自分を労る事の意味を教える物語をくれた。

その次の週。未来への希望を持てずにいた自分に・・・

今ある人生は、全て自分で選び取ってきた結果であるということ。
全ての物事は繋がっているのだ、と言い切ってくれた。

そしておそらく、「散らばった数々の偶然は、自分の力で繋ぎ合わせる事が出来る」ということ。
彼女は、バラバラの物語をひとつに縒り合わせる事で、それを伝えてくれた。

そういった解釈は全て、男の推測に過ぎない。
単に、彼女の話を自分に引き寄せてこじつけただけかもしれない。

だが、男はそれを信じた。

今までの物語を初めから思い返していた男に、マスターは問いかけた。

「お客様も、何か言われましたか」

「も？」

マスターの言葉に引っかかり、男は顔を上げた。

「彼女、他の客にも、物語を？」

第五週　彼女の物語

「ものがたり？さて、私には何の事か・・・」

男は説明した。

自分のために、彼女が物語を作って祈ってくれていたこと。
それは不思議と、心の底で彼がおそらく必要としていた言葉であり、結果として彼に影響を及ぼしたこと。

「俺、まるで予言を聞いているような気がしてたんです」

「・・・そうでしたか。でも、私の知る限り、他の方々とは普通の会話をしていたように思います。他の時間帯、店は結構混んでいましたから」

そうだった。

「なんか、まるで・・・俺のための店みたいだ。少なくとも、この時間だけは」

以前、そんなことを言ったのだった。

俺のための店。

俺のための物語・・・・

それは、真っ暗な道をトボトボと歩いているときに現れた、小さな灯のようだった。

最初はとても、ちいさな灯。
足元をようやく照らすような。

だが、物語が重なるにつれ、その灯は少しずつ、大きく明るくなっていった。

そして、先週の物語。

店員は言った。

「これからは、自らの頭で物語を紡ぎ、自らの言葉で明日の希望を語り、自らの手で未来を拓くのだ」

「諦めたら、そこで試合終了だよ」

最後に俺は、手渡されたのだ。

彼女によって灯された灯。
自分の未来を照らす灯を、自らの手に。

「彼女は、とても繊細で敏感な人です。敏感すぎるくらいに」

マスターの声で、男は物思いから引き戻された。

「相手の表情や雰囲気、話し方などから、様々なことを瞬時に受け取ってしまう。
必要以上に察してしまうこともあったのでしょう。初めてここへ来たときは、ひどい状態でした」

「え・・・」

ひどい状態？・・・いつも穏やかに笑っていた、彼女が？

「愚痴めいたことは何も言わず、いつも笑顔でしたけどね。わかりますよ。客商売を長くやってますからね」

マスターは、軽いため息をついた。

「本当にあの頃は、痛々しかったですよ。溺れる寸前で、細い小枝にかろうじてしがみついて震えているみたいな・・・おかしな表現ですが、そんな印象でした。
それなのに、ニコニコ笑ってみせるんですから」

「そんな・・・・一体、何があったんだろう」

マスターは かぶりを振った。

「わかりません。ただ、『家に籠ってひとりで仕事をしてると、息が詰まる』とは言ってましたね」

「家で、仕事・・・。彼女は、何を？」

「翻訳の仕事をしていたそうです。大きな事務所から委託される形で、細々と。たしか、ベトナム語とか」

「へえ・・・すごいですね」

「ただおそらく、仕事が問題ではなかったでしょう。それ以外で何か抱えていたようでしたね。あくまでも、私の受けた印象ですが」

男は、彼女が「胃を壊したことがある」と言っていたのを思い出した。
もしかしたら、コーヒーを飲み過ぎたせいばかりではないのかもしれない・・・・

「お客さん、『リリーベル』って何の花だかご存知ですか？」

「え？イヤ・・・」

突然話が変わり面食らって口籠った男に、マスターは窓を指差す。

すずらんの意匠のステンドグラス。

「すずらんです。彼女、このすずらんを見つけて、この店に入ったそうなんです。
この話は、最後の最後・・・彼女が辞める直前に聞いたんですがね・・・」

彼女は長い間、暗闇の中でしゃがみこんでいた。淀んだ空気の中で喘いでいた。
出来るだけ感情を押し殺し、一日が過ぎてゆくのを息を潜めてじっと待つ。そんな毎日だった。
誰かに相談することも出来ず、眠る前にただひとつ祈っていたのは・・・

「明日の朝が来ても、ずっと目が覚めませんように。そのまま私が、消えて無くなっていますように」

彼女はある日、園芸店ですずらんを買った。

「どうしても耐えられなくなったら、この根を齧って死んでしまえばいい」

可愛らしく可憐な白い花を咲かせる、すずらん。
その姿とは裏腹に、その根には猛毒が含まれているのだ。

死ぬために買った花なのに皮肉な話だが、それだけが彼女の生きる希望だった。

初めの年、それは可憐な花で目を愉しませてくれた。
花が枯れてからも、２～３日おきに水をやり、園芸店で教えられたとおりに世話をした。

次の年の春、それは律儀に芽吹き、花は少し小さくなったものの、またちゃんと咲いてくれた。

だが、その次の年。
春を過ぎても、芽すら出なかった。
鉢植えを掘り返してみると、球根は跡形も無く消えていた。
まるで、初めからそこには何も無かったかの様に。

そう。彼女が、かつて願っていたように。

彼女は呆然とした。唯一の心の支えを失ってしまったのだ。

途方にくれながら、ただただ何時間も歩き回った。
新しいすずらんを買うことは考えなかった。

彼女の最後の心の砦は、”あの”「すずらん」だったのだ・・・・

「結局最後まで、何に苦しんでいたのかは話さなかったんですがね・・・」
そう前置いて、マスターは苦笑混じりに首を振った。

「まぁ、そういった時期にね、偶然うちを見つけて、フラッと入ったらしいんです。
で、ちょうど手が足りなかったこともあって、なんだかんだでバイトに来てもらうことになって
」

「そんなことが・・・今の彼女からは、想像もつきませんね」

思わずため息をつき、男はすっかりぬるくなってしまったコーヒーを飲み干した。

マスターは、保温していたフラスコからコーヒーを注ぎ足してくれた。

「それを話してくれた時もね、いつものあの調子で『すずらんの根を噛んで死ぬなんて、神話の

中のお姫さまみたいじゃありません？』なんて、笑ってましたけどねえ」

「そんな話をする時でも、やっぱりふざけてるのか。・・・やれやれ、全く」

「人に心配をかけたくない、って性分なんでしょうかねえ。そのくせ、自分は人の心配ばっかりしてね」

マスターは、今度は楽しそうに笑う。

「でもそれが、彼女の助けになったみたいです。たくさんの人と話して、お客さん達の笑顔を見るのが。
彼女には、自然と人の心を和ませるような、天性のものがありましたよ」

男は深く頷いた。

ほんとうに、そのとおりだ。

第五週　金曜のリリーベル

「やあ、よく来て下さいました」

男が来店すると、マスターが笑顔で出迎えてくれた。

「彼女は、やっぱり・・・」

「ええ。来ませんでしたね。実は私も期待していたのですが」

「そうですか・・・」

男は少し落胆しながら、いつもの席に座った。

「翻訳の仕事が忙しくなると言ってましたからね。
なんでも少し前から、ベトナムから移住してくる家族の通訳や引っ越し準備を手伝っていて、近くその家族が来日するんだとか」

「へえ。そりゃ、大変だ。忙しいわけですね」

「ええ。でも、とても良い方達らしくて、仕事が楽しそうでしたよ。彼らとの出会いが、自分の大きな転機になったとまで言ってましたから」

マスターは既に、いつものコーヒーを淹れ始めている。
心安らぐ香りが立ちのぼる。

「この店は？彼女の転機じゃなかったのかな」

そう疑問を発した男に、マスターはごく控えめに笑ってみせた。
が、その謙虚であろうとする微笑みは、内心の誇らしさを隠し切れていなかった。

「実は・・・『この店とマスターと、彼らとの出会い』って、言ってくれましたよ」

「うん。本当に、そのとおりだと思いますよ」

男は心からそう思い、大きく頷いた。
なんというか、マスターからは、実直で優しく素直な人柄が伝わってくる。
彼女にとって、この店とマスターが大きな救いになったのが、わかる気がする。

振り返って、感慨深げに店内を見回す。

「この店とも、今日でお別れなんですね」

普段、男が仕事でこの辺りに来るのは水曜だけだっだ。
だが、今日は営業最終日ということで、仕事を無理矢理終えて駆けつけたのだった。

金曜の２０時過ぎに見る店は、当然ながらいつもと全く違って見える。
各テーブルに配された丸いグラスの中にはキャンドルの炎が小さく揺れ、薄暗い店内をほんのりと照らしている。

その灯りは、最後の物語で手渡されたように感じた、あの小さな灯火を思い起こさせた。

「あれ・・・」

今日は、珍しく先客がいたようだ。

窓際の席に、コーヒーカップがひとつ残されている。
椅子の背もたれには、ミルク色のジャケットがかけてある。

「どうかなさいましたか？」

「あ、いえ。この店で、俺以外に客が居たのって、初めて見たから・・・あ！イヤ、スミマセン！」

自らの失言に慌てふためく男に、マスターは可笑しそうに笑った。

「彼女も言ってましたよ。水曜４時は、何故か貸し切り状態になるんだって。きっと、それもご縁だったんでしょうね」

そう言いながら、男の前にコーヒーを置く。

「どうぞ。これは不思議なご縁のお客様への、私からのお礼です」

男は丁寧に礼を言ってコーヒーを引き寄せながら、ふとカウンターの隅にある名刺に目を留めた。

「ああ、これですか。そこのお客様の名刺ですよ。うちのステンドグラスを譲って欲しいとのことでね」

窓際の席を指す。
すずらんのステンドグラスの真下の席、空のコーヒーカップ。

「なんでも、グラスアートとかインテリアとか？そんなものを扱っている方らしくて」

「えっ？！」

男は驚いてマスターを見上げた。

彼女の最初の物語・・・・

（「あ、ちょっと待って下さい。彼女…お嬢様は、インテリアとか美術工芸品を扱う仕事を始めようとしてる人」）

そのとき。

さっと風が吹き込み、カランコロンと音をたてた。

男が初めて、店の中で耳にするカウベルの音だった。

思わずドアの方を振り返る。
ドクン、と心臓が大きく打った。

「・・・な、なにか？」

ドアを開けて入って来たのは。

初対面の男から向けられた視線の、余りの勢いに射すくめられた、美しい女性だった。

第五週　グレンフィデック１８年

席を外しているらしき先客がインテリアを扱う仕事と聞いて、最初の物語を思い出し驚いたその矢先。
店に戻って来たその先客は、美しい女性だった。

男は、運命を感じた。イヤ、感じずにはいられなかったのだ。

（また、予言が・・・）

思わず正面から女性を凝視してしまっていた男は、ハッと気がついて慌てて立ち上がった。

「いや、なんでもないんです！すみません！すみません・・・」

オロオロとしどろもどろに謝る男をみかねたのか、マスターが助け舟を出してくれた。

「先方とは、連絡がつきましたか？」

マスターの言葉に、女性の金縛りが解けた。

「え、ええ。おかげさまで。アポイントが取れました」

「それは良かった。では、少し早いけれど店仕舞いしてしまって・・・」

高価そうな酒のボトルを掲げて、微笑んでみせる。

「もしよろしければ、祝杯などいかがです？」

閉店後の、喫茶リリーベル。

フロアの照明とテーブルのキャンドルは全て落とし、カウンターの天井からのダウンライトだけが灯りの全てだ。

マスターがいつも仕事の後に１杯楽しむという、秘蔵のシングルモルトを振る舞ってくれていた。

最初の一杯は、彼女の仕事のお祝い。

この店のステンドグラスを作った工房と、無事連絡が取れたのだ。

「この店は、予定通り畳むんですがね・・・やっぱり私はこの仕事が好きでね。
実家のある長野で、また小さな喫茶店を開こうと思い直しまして。ステンドグラスをお譲りするのを、お断りしたんですよ」

女性は首を振って笑った。

「奥様との思い出の品ですもの。そんな大切なもの、さすがに頂けませんし」

「なるほど。それで、替わりにステンドグラスの工房を紹介した、と？」

「ええ。工房が転居していたらしくて、随分調べて下さって・・・本当に、ありがとうございました」

女性はグラスを置いてマスターに向き直り、深々と頭を下げた。

「いえいえ。あのステンドグラスを絶賛していただきましたからね。
あれは、妻が描いた絵を元に、デザインしてもらったものなんです。素晴らしい工房ですよ」

マスターが眼を細めてステンドグラスを見遣る。

ふたりもつられるように、首を巡らせた。

「ええ。一目見て、オリジナルだとわかりました。
なかなか見かけない、斬新かつ繊細なデザインですもの」

女性も深く頷きながら窓を眺めた。

中央に大きなすずらんが一株。
葉の部分は濃い緑と薄い緑で筋状に描かれ、そこから細い茎が伸びる。
僅かに垂れ下がった茎の先端には 可憐な白い花が数輪、鈴の様に連なっている。

花の周りの大きな面積は幾何学的に区切られており、透明な濃い黄色と 半透明の薄い檸檬色で彩られている。
ここを透過した光は、温かいはちみつ色に染められる。

端の方へ行くにつれ、そのモザイクは小さく複雑になってゆき、水色や淡いピンク色、不透明な白や紺色など、様々な色がランダムに配されている。

街灯の明かりを通し、昼間とは違う幻想的な光を投げかけている。

しんみりと窓を見つめながら、ふくよかな香りの酒を嗜んでいると、男はふと思い出した。

「そういえば、今日は奥様の誕生日だって・・・」

「あら。そうなんですか？」
女性も振り返って、マスターに視線を戻す。

「やあ、憶えてて下さったんですか。嬉しいなあ」

マスターはニコニコと、酒を注ぎ足してくれた。
女性のグラスにも、もちろん自分のグラスにも。

男はグラスを掲げた。

「じゃあこれは、奥様のお誕生日に」

「乾杯」

マスターも、目線の高さまでグラスを掲げる。

「生前よく、妻とも仕事終わりにこんな風に乾杯したもんです。
・・・こんな風に祝ってもらえるなんてね。この店の最後の、良い思い出になりましたよ」

女性は掲げたグラスを口に運ぶと、再びグラスを上げて透かし見た。
天井の照明を受けて、液体の織りなすマーブル模様を眺めている。

「私、ウイスキーってあまり飲んだことが無かったけど……このお酒、とても美味しい。飲みやすくて」

「そうでしょう？グレンフィディックの１８年。希少なお酒です。
口当たりがいいのでね、いつもは１杯だけと決めてるんですよ」

そう言って、マスターは笑った。

「ほら。飲み過ぎても、止めてくれる人が居なくなっちゃったから」

少し気まずくなって、男は思わず女性と目を見交わした。
そしてふたりとも、僅かに俯いて曖昧に微笑んだ。

「あのステンドグラスは・・・」

若干重くなった空気を変えるように、男が口を開いた。

女性は少しホッとした表情を見せた。

「長野での、新しいお店に？」

「ええ、そうです。そのつもりです。外すのも運ぶのも、費用が嵩みますがね。
やはり、愛着がありまして」

「じゃあ、向こうでも・・・きっと、色んなものを結びつけることになるんだろうなあ」

男は頬杖をつきながら またステンドグラスを眺め、想いを馳せるように遠い目をした。

「かもしれませんね」
マスターは、若干イタズラっぽい表情でニッと笑う。

「あのステンドグラスのここでの最後の仕事は、おふたりを引き合わせたことでしょうね」

男は思わず、咽せて咳き込んだ。

「そういえば、さっきはほんとにビックリしました。
電話を終えてお店に戻ったら、いきなりすごい勢いで睨みつけられたんですもの」

言葉とは裏腹に、その女性の声は笑いを含んでいる。

「イヤ、すみません。本っっ当にごめんなさい」

男は軽く咳払いをすると、グラスを置いて深く頭を下げた。
が、こちらも若干、笑いが混じっていた。

「予言が当たったのかと思ってね、思わず・・・・」

「予言？」

女性が驚いて聞き返す。興味を引かれたようだ。

「イヤ、話せば長くなるんだけど・・・つい最近まで、ここで働いていた女性がいましてね。ね？マスター」

マスターは、わざと秘密めかして声を落とす。

「そうそう、これがとても面白い子でしてね・・・・」

「ろくじゅうご、ろくじゅうろく、ろくじゅうしち・・・・」

完全に日課として定着した、腹筋と腕立て伏せ。

今やそれぞれ５０回どころか、１００回ずつを２セットこなすまでになっていた。

男は今日も、祈りながら腹筋をしている。

幸せを祈りたい相手の、笑顔を思い出しながら。

以前には、別れた元妻の笑顔を思い出せなくて落ち込んだこともあった。

だが、あの喫茶店でのささやかなお別れパーティーで・・・

酒もすすみ 若干酔いの回った勢いで
「別れた妻の幸せを祈りたいが、彼女の笑顔が思い出せない」と漏らしてしまった男に、マスターが言ってくれたのだ。

自分も同じだった。
妻を亡くしてしばらくは、彼女の辛い様子や苦しげな顔しか思い出せなかった。
だが、時が経てば、ちゃんと思い出せるようになる、と。

「もしかして、自分を責めてませんか？罪悪感に閉じ込められているうちは、相手の笑顔なんて思い出せない」

「・・・・・そりゃ、ね。俺が悪かったんだから。
俺が馬鹿すぎて、たくさん迷惑かけちゃったんでね・・・」

自嘲気味に力なく笑う男に、マスターは言葉を継いだ。

「人間関係において、１００対０でどちらかが悪いなんてことは、そうそうありませんよ。特に、夫婦の間ではね」

「イヤ、でも・・・」

「特に疲れているときなんかはね、些細なことでも気に障ったりね。みんな、あるじゃないですか」

「ん・・・でも」

マスターは、珍しく男の話を遮って、一息に言った。

「『お客さんは悪くない』とも、『奥さんにも悪いところがあったんじゃないか』なんてことも、私は言いませんよ。
ただね、そういう巡り合わせとか、すれ違いとか、そういうのってね・・・当人同士でどうしようも無い時があるもんですよ」

「ああ・・・だから、『自分を責め続けるのは、それくらいにしたら？』ってことかしら？」

今まで隣で黙って聞いていた女性が、口を開いた。

「そうそう。そういうことです」

マスターは声をあげて笑い、我が意を得たりとばかりに頷く。

いささか強引だったが、それが却ってありがたかった。
男は感謝を表わすようにペコリと頭を下げた。

「それにしても。別れた相手の幸せを祈れるなんて、素敵なことね」

「同感です」
マスターが即座に相槌を打つ。

あ！と女性が声を上げ、瞳を輝かせた。

「じゃあマスター、私達でこの人が奥さんの・・・
いえ、元奥さんの笑顔を思い出せるように、お祈りしましょうよ」

「え・・・い、いいよ。そんな・・・」

尻込みする男を他所に、ふたりは示し合わせたように手を合わせて 祈り始める。

「ん〜〜〜〜！思い出せますようにぃぃぃ〜！！」

眉間に皺を寄せきつく目を閉じて祈る女性を横目で窺いながら、マスターは笑いを堪えている。

「いや・・・お祈りっつっても、そういうカンジじゃないんだけど・・・・」

「ん〜〜〜〜・・・ハァァッ！！！」

合わせていた両手のひらを男に向け、気合いのかけ声。

「あー・・・うん。まあ、いっか。ははは・・・」

悩んでいるのが莫迦らしくなって、男は眉の横をコリコリと掻きながら笑った。

マスターも、俯いて肩を揺らしている。

男は大げさにしかつめらしい表情を作り、背筋を伸ばして頭を下げた。

「ありがとうございました。気合い、入りました」

女性が満足げに頷き、３人は同時に笑い出したのだった。

「はちじゅうに、はちじゅうさん・・・」

（結局あの翌日、ちゃんと思い出せたんだよな・・・）

玄関で、鍵を回す音がした。

「ただいまー」

明るい声に、男が答える。

「おー、おかえりー」

スーパーのビニール袋をガサガサいわせながら入って来たのは、あの女性だ。

リリーベル最後の日、運命の出会いをした、あの女性。

「あら、お祈り中だったのね。足、持ちましょうか？」

ヤツデの鉢を足の間に挟んで重しがわりにしているのを見て、彼女が訊ねた。

「ううん。もうすぐ終わるから、大丈夫」

彼女は笑顔で頷くと、買い物袋を持ってキッチンへ入って行った。

買ったものを冷蔵庫にしまう音を聞きながら、腹筋を最後まで終わらせる。
次は、腕立て伏せだ。

男が筋トレをしている間、彼女は絶対に声を掛けてこない。

お祈りをしていることを知っているからだ。

付き合っている相手が元妻の幸せを祈ることに、抵抗は無いのか。

男は以前、そう訊ねたことがあった。

彼女は笑って言ったものだ。

「他人の不幸を願うような男より、何千倍も素敵じゃない？」

それを聞いたとき、男は何度目かになる確信を得た。

やはりあの物語は、予言だった。
祈りが通じ、彼女との出会いは運命になったのだ。

元妻や、転勤になった会社の同僚、学生時代の交流の途絶えた友人などの幸せを祈りながら、いつものように腕立て伏せを終える。

軽く汗を拭うと、男もキッチンへ向かう。一緒に料理を作るために。
といっても、ちょっとした手伝いぐらいしか出来ないのだが。

ふと、カウンターの上に目を留めた。

「あれ。君も買ったの？貸してあげる約束したから、俺、急いで読んだのに」

彼女はにんじんを洗う手を止めて、振り返った。

「うん。あのね、私も自分で持っていたかったの。発売日当日に、自分で買いたかったの。
だって、私たちが出会うきっかけになった人の本だもの」

「そっか・・・・」

あの日、興味津々の彼女に、マスターと代わる代わる緑川ゆりの話をして聞かせたのだった。

緑川ゆりの紡ぐ物語。
それは彼にとって、まるで予言のように働いたこと。
その祈りが、彼の再生を助けてくれたこと。

緑川ゆりがいなければ。

その物語が無ければ。

彼の性格から言って、いま包丁を持って彼のキッチンに立っているこの女性と、名刺交換などしなかっただろう。

そして（酒の勢いもあったとはいえ）、「じゃあ、今度お食事でも行きますか。牛丼屋に」と冗談半分に誘うことなど、到底出来なかっただろう。

もちろん、それに
「行きます！私、牛丼屋さん、行ったこと無いんです！！」
と、興奮も露に同意してもらえることなど、絶対に無かったはずだ。

（因にこの時の会話は、今ではふたりのお気に入りのエピソードになっている）

その後も付き合いは続き、今では週末毎にどちらかの家で過ごすようになっていた。

不思議なもので、仕事の方も上手く進むようになり、最近ではヘッドハンティングの話すらチラホラ出始めている。

だがそれには、男は慎重になっていた。
もし転職となれば、ふたりの将来にとって重大なことだからだ。

「読むの急がせちゃって、ごめんなさいね」

彼女の言葉に、手に取った本を置いた。

「イヤ、俺が勝手に急いだだけだし。それに、ブログであらかた読んでたからね」

「もうコメントは送ったの？」

「いや、まだだよ・・・『牛丼屋のお嬢様と結婚することになった』って書いたら、驚くだろう

なあ」

彼女は吹き出した。

「牛丼屋のお嬢様、じゃ・・・端折りすぎで色々意味が違っちゃって、わからないんじゃない？」

男は、笑いながら首を振る。

「いや、きっとわかるさ。『水曜４時・Ｃ２の客より』って書くからね」

『緑川ゆり』の名前をインターネットの中で見つけたのは、あの翌年の冬だった。

彼女が手紙に自分の名前を残したことが、男はずっと気にかかっていた。
どこかでまたその名前に出逢うのではないかと期待して、度々検索していたのだ。

やっと見つけた彼女は、自身のブログで小説を発表していた。
連載は始まったばかりで、その後の更新は不定期だった。

が、そこには。
読む者の心の奥をほのかに照らすような、優しい物語ばかりが綴られた。

男はそれを熱心に読み続けた。

彼女のブログは、コメントやメッセージを一切受け付けない設定だったため、こちらから連絡を取ることは出来なかった。
だがこの度、その小説が書籍化されたことで、オンラインの書籍販売サイトにレビューを書き込むことが可能になったのだ。

彼女のブログに直接書き込むわけではないのだが、彼女はきっと、彼からのメッセージを目にするだろう。

「あなたのお祈りは、確かに通じました。俺は今、とても幸せです」

メッセージは、そう締めくくるつもりだ。

そのメッセージを読んで、彼女はあの日のように「うふふ」と笑ってくれるだろうか。

対面式のキッチンカウンターの向こうには、一緒に料理をする幸せそうなふたりが見える。

カウンターの側に置かれた、青々としたヤツデの鉢。

ヤツデの葉は微かに揺れ、すずらんのステンドグラスが描かれた本の表紙に、うっすらと影を落としている。

その本のタイトルは・・・・・

『水曜のリリーベル』

ー　おわり　ー

最後までお読みいただき、ありがとうございました。